

# 銀のつえ

小川未明

青空文庫



あるところに、いつも遊び歩いている男がありました。兄さんや、妹は、いくたび彼に、仕事をあげむようにいったかしません。けれど、それには耳を傾けず、街のカフェーへ行って、外国の酒を飲んだり、紅茶を喫したりして、終日ぼんやりと暮らすことが多かったのです。

彼は、そこで蓄音機の音楽をきいたり、また、あるときは劇場へオペラを見にいたり、おもしろく暮らしていたのでありました。

ある日のこと、彼は、テーブルの上に、いくつもコップを並べて、いい気持ちに酔ってしまったのです。そして、コップの中に

はいった、みどり緑・あお青・あか赤、いろいろの酒の色に、ぼんやり見とれて  
いますと、うとうとと居眠りをしたのでした。

もう、いつのまにか、日は、とつぷりと暮れてしまいました。

「ああ、もう帰らなければならぬ。」と、彼はいつて、その力  
フエーから外に出たのでした。彼の足は、ふらふらしていました。  
そして、まだ、耳には、けさしがたまで聞いていた、いい音楽  
のしらべがついているようでありました。

夜の空は、ぬぐったガラスのように、うるおいを含んでいまし  
た。月がまんまるく空に上がって、あたりの建物や、また森  
影などが、浮き出たように見られたのであります。

彼は、さびしい、広い往來を歩いてきますと、ふいに、そこ

へわき出たように、一人のおじいさんがあらわれました。そのおじいさんは、白いひげをはやしていました。そして、手に光るつえを持つていました。そのつえは、銀で造られたように思われま  
す。

おじいさんは、彼の歩いている行く手に立つて、道をふさぎました。彼は、頭を上げて、おじいさんを黙つてながめたのです。

おじいさんは、なにか、ものをいいたげな顔をしながら、しばらく、口をつぐんで彼のようすを見守つていました。彼は、このおじいさんを見ると、なんとなく体じゆうが、ぞつとして、身の毛がよだちました。おじいさんの目は、氷のように冷たい光を放つて、刺すように鋭かったですからであります。

それよりも、彼は、このおじいさんを、かつてどこかで見たとがあるような気がしました。子供の時分にきいたお伽噺のなかで中に出てきたおじいさんのようにも、また、なにかの本に描いてあつた絵の中のおじいさんのようにも、また、彼が音楽を聞いている時分に、頭の中で空想したおじいさんのようにも、……であつたかもしれないのでありました。

「おまえは、私を見たことがない。けれど、空想したことはあつたはずだ。おまえは私をなんと思うのだ。」と、おじいさんは、おもおも重々しい口調でいきました。

彼は、答えることを知らずに、うなだれていました。

「おまえは、私が思うようにしなければならぬだろう……。お

まえは、まだ年が若いのに、遊ぶことしか考えていない。そして、いくら、いましめるものがあつても、おまえは、それに対して耳をかきなかつた。」と、おじいさんは、いいました。

彼は、力なくうなだれていたのです。

「おまえの命を取つてしまつては役にたたない。いま、ほんとうに殺すのではない。一時、おまえを眠らせるまでだ。なんでもおまえは、私のいうことに従わなければならない。おまえは、私が起こすときまで、墓の中にはいつて眠れ……。」と、おじいさんはいつて、光つたつえで地面を強くたたきました。彼は、そのま道の上に倒れてしまったのです。

おじいさんの姿は、まもなく、どこかに消えてしまいました。

そして、道の上に、男は、倒れていました。

彼の兄や、妹や、また、カフエーのおかみさんたちは、みんなとしわか年若くして死んだ、彼をかわいそうに思いました。彼の体を黒い箱の中に入れて、墓地へはこんで葬ったのであります。

黒い箱は、男をいれて地の中に埋められました。それから、春の雨は、この墓地にも降りそそぎました。墓の畔りにあつた木々は、幾たびも若芽をふきました。そして、秋になると、それらの落ち葉は、悲しい唄をうたつて、空を飛んだのであります。男は土の中で、オペラの夢を見ていました。こちようのような、少女が舞台を飛んでいます。男は、また、いつものカフエーにいて、テーブルの上に、いろいろの色をした酒の注いであるコッ

プを並べて、それをながめながら飲んでいゝ夢を見ていました。  
男にとつては、それは、ほんのわずかばかりの間でした。ふいに、  
彼は、揺り起こされたのであります。

「さあ、私についてくるがいい。」と、銀のつえを持ったおじい  
さんがいいましたので、男は、ついてゆきますと、やがて、彼は、  
さびしい墓場に出たのであります。

「おまえの墓は、これだった。この下に、いままでおまえは、眠  
っていたのだ。」と、おじいさんは、一つの墓石を指しました。  
白い大理石の墓が建てられていました。そして、それには、  
自分の名が刻まれていました。兄さんが、建てられたということ  
がすぐわかりました。

また、墓はかのまわりには、美うつくしい花はながたくさん植うえられていました。それは、やさしい自分じぶんの妹いもうとが植うえてくれたということがわかりました。彼かれは、死しんでからも、自分じぶんにやさしかった、兄あにいもうとや妹妹を思おもうと、なつかしきにたえられなかつたのです。早はやく帰かえつて、兄あにいもうとや妹妹に、あいたいと思おもいました。

「いや、おまえは、自由じゆうに、どこへもゆくことはできないのだ。ただ、私わしについてくればいい。私わしは、おまえが見みたいという人ひとたちに、あわせてやろう……。」「と、おじいさんは、冷つめたい目めでじつと見みながらいいました。

「おまえは、兄にいさんを見みたいだろう？」と、銀ぎんのつえを持もつた、おじいさんは、いいました。

彼は、うなずきました。

「つれていってやろう。けれど、声をみだりにたててはならない。もし、私のいうことをきかないときは、このつえでなぐる。するとおまえの体は、微塵に碎けてしまうぞ。」と、おじいさんはいきました。

彼は、おじいさんのあとについてゆきました。そして、なつかしい我が家の前に立つと、だいぶんあたりのようすが変わっていました。

「どうして、わずかの間に、あたりが変わったのだらう？」と、彼は、不思議に思いました。

「あの白髪の働いている人は、だれだらう？」と、彼は、たずね

ました。

「おまえの兄さんだ。」と、おじいさんは、いいました。

彼は、びっくりしてしまいました。どうして、なにもかもわずかなうちに変わってしまったのだろうか？

「妹は、どうしたろうか。」と、彼は、いいました。

「いま、つれていってやる——黙って、ついてこい。」と、おじいさんは、先になつて歩きました。そして、いろいろの巷を通つて、ある家の前にきました。

「あすこにすわっているのが、おまえの妹だ。」と、おじいさんは、いいました。

そこには、顔に小じわの寄つた女がすわつて、針仕事をして

いました。子供が二人ばかりそばで遊んでいました。彼は、よく、その女を見ていましたが、まったく、自分の妹の顔であると知りませんと、深い、ため息をもらしたのです。

「おまえのよくいった、カフェーを見たいだろう。」と、おじいさんはいいました。

彼は、うなずきますと、おじいさんは、先になつて歩きました。やがて、見覚えのある街に出ました。そこには、彼のよくいったカフェーがありました。

知らない男が、酒を飲んだり、ソーダ水を飲んだり、また、蓄音機をかけたたりして時間を費やしていました。いつか、自分がそうであつたのだ、彼は思つて見ていました。そのとき、白い工

プロンをかけた、脊せの低い女おんなが、帳場ちやうばにあらわれました。その女おんなこそ、彼かれがいった時分じぶんには、まだ若わかかつたこの店みせのおかみさんであつたのです。

「ああ。」と、彼かれは、ため息いきをもらしました。

おじいさんは、先さきになつて、その店みせの前まえを去さり、あちらへ歩あるいてゆきました。彼かれは、黙だまつて、その後あとについてゆきますと、いつしか、さびしいところに出でて、橋はしの上うえにきたのであります。

おじいさんは、このとき、彼かれの方ほうを振り向むいて、

「おまえは、兄きょうだい妹まい、カフエーの人ひとたちに、もう一度どあつて、

話はなしをしたいと思おもうか。それとも、あの静しずかな墓はかの中なかへ帰かえりたいと思おもうか。」とたずねました。

彼は、どういつて、返事をしたらいいかわかりませんでした。

「どうか、しばらく考えさしてください。」と、彼は頼みました。

「日暮れ方、私は、また、ここへやってくる。それまでによく考えた方がいい。」と、おじいさんはいつて、どこへか姿を消してしま

まいました。

彼は、独り、橋の欄干にもたれて、水の流れを見ながら考え

ていました。もう秋で、あちらの木立は、色づいて、吹く風に、葉が散っていました。

ふと気がついて、彼は、自身の体を見まわしますと、いつのま

に、年を取ったものか、みすぼらしい老人になっていました。

昔話に、よくこれに似たことがあつたのをききましたが、彼

は、いまそれが自分の身の上であることに驚き、おそれたのであります。

日が暮れて、月が出ました。その光はさびしく水の上に輝きました。そのとき彼は、おじいさんのついでに照らされて青白く光つたのを見ました。おじいさんは彼の前に立っていました。

「私は、墓へ帰ります。」と、彼は、いいました。

おじいさんは先に立って、彼はあとについて、だまって歩いてゆきました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「童話」

1924（大正13）年11月

※表題は底本では、「銀《ぎん》のつえ」となっています。

※初出時の表題は「銀の杖」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銀のつえ

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>